

-----  
当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

-----  
共同利用・共同研究課題「アジア協会設立前後のカルカッタにおける知的交流: 近世の伝統からコロニアル・エピステーメへ (jrp000304)」2024年度第1回研究会

日時: 2024年8月4日(日) 14:00-18:00

場所: 本郷サテライト 3F セミナールーム, オンライン会議室

使用言語: 日本語

小倉智史 (AA 研所員), 張本研吾 (ナポリ東洋大学, AA 研フェロー) 「趣旨説明」

小倉智史 (AA 研所員) 「事例紹介『アクバル会典』と近代インド学: 六派哲学の記述を中心に」

全員 「メンバーの自己紹介, 今後の研究会の打ち合わせ」

内容

1. 小倉智史 (AA 研所員), 張本研吾 (ナポリ東洋大学, AA 研フェロー) 「趣旨説明」

こんにちのインドで、ヒンドゥー・ナショナリストたちによって唱えられているインドの「伝統」のうち、その多くが英領インド期に「発見」「構築された」インド観の強い影響下にあるという指摘は、つとになされている。例えば、ジェイムズ・ミル『英領インド史』で説かれる「ヒンドゥーの古代」「イスラームの中世」「イギリスの近代」というインド史の三区区分は、インドの中等・高等教育における歴史教育から、ムスリム王朝時代を削除しようとする、現代のヒンドゥー・ナショナリストの政治運動にも影響を与えている。その背後には、啓蒙主義を経験した西洋人たちの「幻想の東洋」への憧れ、非西洋たるインドへの本質的差異化が、初期インド学に貢献した研究者たちの動機にあったとは、サイード『オリエンタリズム』以降のコロニアル・スタディーズが説明するものである。他方で「構築」された「インド観」が全くのゼロから出来上がったわけではない。ここ10年ほどのインド学の研究は、英領期に先立って、近世インドでヴェーダーンタ思想を中心とした諸伝統の体系化が起りつつあったことを指摘している。しかし、それらの研究から得られた知見は、コロニアル・スタディーズの分野に十分反映されているとはいえない。その理由として、一人の研究者が扱える資料の幅の制約や、フォローできる先行研究の範囲の限界が挙げられる。反対に、報告者を含む前近代の文献を主に扱う研究者は、コロニアル・スタディーズや宗教学、人類学の最新の研究動向に弱い。そこで本研究課題では、1) 近世以降のインドの諸伝統の体系化の流れに関する

る、最新のインド学の成果に基づいたフォロー、2) 18 世紀末のカルカッタで活躍した東洋学者と現地の知的選良との実相を、一次資料に基づき分析、3) 初期インド学の研究者の著作や手紙などの内容分析と、彼らの「インド観」が西洋世界に還流していった経緯を分析する、といったことを今後 3 年間の研究期間に実施する。

## 2. 小倉智史 (AA 研所員) 「事例紹介『アクバル会典』と近代インド学: 六派哲学の記述を中心に」

ブラフミンの側から見たインド哲学の諸学派の正統と異端を区別する分類として、正統なアースティカと異端のナースティカというものがある。アースティカには 1) サーンキヤ、2) ヨーガ、3) ミーマーンサー、4) ヴェーダーンタ、5) ニヤーヤ、6) ヴァイシェシカの 6 学派が含まれ、もっぱら「六派哲学」と呼ばれる。これに対してナースティカには仏教やジャイナ教、順世派などが含まれる。一般的にアースティカとナースティカを分ける基準は、ヴェーダ聖典の権威を認めるか否か、とされるものの、前近代のサンスクリット学説綱要集においてそのような基準が適用されているわけではない。

サンスクリット学説綱要集の成立に先立って、早くも 6 世紀のタミル語仏教叙事詩『マニメーハラ』にインドの諸学派への言及があり、8 世紀のハリバドラ『六ダルシヤナ集成』を嚆矢として、12 世紀ごろまではジャイナ教徒が、以降はヴェーダーンティンが学説綱要集を編纂した。しかしいずれの作品にも上記の六派を正統とする区分は見られない。

管見の限り、上記六派を「六派哲学」という名称と共に、正統と見なしたのは、ムガル帝国第 3 代皇帝時代の 16 世紀末に、アブルファズルが編纂したペルシア語文献『アクバル会典』が最初である。アブルファズルが何に基づいて六派を分類したのかは定かではない。『アクバル会典』成立後もサンスクリット学説綱要集は変わらず様々な諸学派の分類を採用しており、ペルシア語文献でも、カイホスロウ・イスファンディヤール『諸宗派の学院』のような、独自の分類によってインドの諸学派を説明するものがある。

『アクバル会典』は、カルカッタのフォート・ウィリアム・カレッジでペルシア語の教授を務めた、フランシス・グラッドウィンによって、1786 年に英語に翻訳された。グラッドウィンの英訳は 200 人以上の英国人に送付されており、その中にはウォーレン・ヘイスティングズやウィリアム・ジョーンズらの名前が見える。そしてグラッドウィンによる英訳の出版を契機として、ジョーンズやヘンリー・トーマス・コールブルックの著作の中に、「六派」への言及が現れるようになる。特にコールブルックの著作は、フリードリヒ・マックス・ミュラーによって全幅の信頼を置かれ、ミュラーやパウル・ドイセンなどのサンスクリット学の研究が登場することで、六派哲学が正統な学派であるという見方がヨーロッパでは一般的なものになっていった。

(文責: 小倉智史)